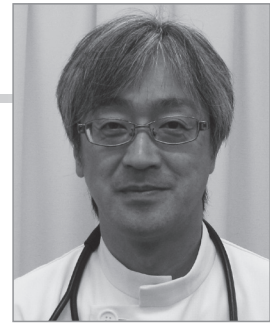


エディトリアル

六ヶ所村国民健康保険尾駮診療所 所長 松岡史彦



Generalistの歴史はるかギリシャのころに端を発すると言われる。科学の歴史になぞらえて原始的で未分化なあり方だととらえる風潮がある。科学としての医療という圧倒的な力で医師たちは自らを科学者と規定しspecialistという細分化の方向に向かうのであったが、全体性は損なわれ関係性や文脈性はデブリスとされた。しかし、一般の人たちにすれば全体性や関係性は医療の大前提なのである。その上に立つ専門技術や知識でなければならぬ現代医療の中で、新しいgeneralistたちが次々に生まれている。何が起きているのだろうか。

彼らのキャリアを紹介することで医学の領域を越えて日本の社会構造や価値観が確認されるだろう。その必然性と重要性がこれから医師としてのキャリアを始める若手医師に伝わり、今後の道標になることを願う。またその中にこそgeneralistを育成するための教育のヒントが隠されているはずだ。これら指導医クラスの方々が語るキャリアと自己省察は非常に魅力的で、まるで地上の星の物語のようである。ぜひ、全編をお読みいただきたい。

さて、generalistたちは、総合医・家庭医、プライマリケア医等と呼ばれている。全体性と文脈性を特徴とするgeneralistたちは年齢や性別、臓器別に対応するのではない。臓器ではなく病態にまず対応するのであり、症状から診断を始め、自分の置かれた状況の中で、時間という流れを意識しつつ最善の活動を選択しようとする。自分との関係性に基づいた行動を基本とし、自己省察によって自己を変えてゆくという特徴もある。

このようにgeneralistの基本的原理は説明可能であるが、日常の診療でどのように反映されているかは分かり難い。漫然と見学するだけでは分からない。絶えず変化する関係性・文脈性の中でgeneralistの診療が構成されることを理解するには個々の文脈に身を置くしかない。日常を通して

generalistのあり方や方法論を提示いただいた理由はここにある。

都会の家庭医として、千葉でご開業の和座一弘先生にご執筆いただいた。地域医療・家庭医療の黎明期と五十嵐正紘先生との出会い、現代の家庭医診療のあり方が情熱と経験とともに語られている。都会ならではの「協働」というあり方が社会活動、生涯学習の場として示されている。

地域診療所の家庭医である米田博輝先生(青森県)からは、地域医療や家庭医療の意味を問い続けた心の変遷が伝わってくる。「情報カード」とEBMの実践は、抽象的になりがちな家庭医療の方法論を現実に取り寄せた努力の結晶である。

同じく地域の家庭医である伊豆半島のいなざ診療所の川崎 祝先生のキャリアは、自治医科大学の出身者とは異なる。家庭医の生き方を自ら選んで進むあり方は清廉で力強い。一般的な多くの医学生に共感が得られるものと思う。

地域中核病院の総合医として、青森県立中央病院総合診療部の葛西智徳部長に執筆をお願いした。先生のキャリアは文脈や必要性によって自己を変えてゆくgeneralistのあり方そのものを表現している。過去の業績にこだわらず新しい状況に転進する姿は本当に清々しい。

東京北社会保険病院の南郷栄秀先生には都市部教育病院の総合医として執筆いただいた。EBMとの出会いがキャリアに大きな影響を与え、さらにEBMの実践そのものが家庭医・総合医の基本である患者中心の医療となっている。

地方小病院の総合医として、湯沢町保健医療センター(新潟県)の浅井泰博先生に執筆をお願いした。自治医科大学の卒業生という初期設定であるが、浅井先生にしか得られなかった多くの人との出会いや関係性の中でgeneralistになってゆく様子が分かる。健やかなgeneralistを育成するのは抽象論ではなく、問いかけている環境とその問いに気付く個人の感性なのかもしれない。